奴隷への航海

ｆｅｍｃｉｒｃ

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

【作品タイトル】
奴隷への航海

【Ｎコード】
Ｎ７４０３ＢＷ

【作者名】
ｆｅｍｃｉｒｃ

【あらすじ】
ソマリア沖で海賊に襲われた豪華クルーザーに乗船していた白人女性たちの公開割礼。

第一話　海賊の人質

――ＣＮＮニュース。
『本日未明、ソマリア沖でアメリカ人観光客を乗せたクルーザーが海賊に襲撃されました。なお、海賊たちによってシージャックされたクルーザーはソマリア国内の港町に向かった模様です。この海域は、通称〝アフリカの角〟と呼ばれている場所で、海賊による旅客船や貨物船への襲撃が頻発しており、非常に危険な……』

ボストン――海運会社クルージングドリームの本社ビルにて。
「本日未明、わが社のクルーザー、《青い（ブルー）珊瑚礁（ラグーン）》号が〝アフリカの角〟沖で海賊によって拿捕され、人質となっている観光客たちは、全員がソマリアの小さな港町から上陸させられたようです」
観光船事業の部長がＣＥＯを前にして状況を説明する。
「社としては、さらなる詳しい情報と人質解放の朗報がいち早くもたらされることを期待している。可能な限り速やかに海賊との交渉を進めてくれたまえ」
ＣＥＯとしては、騒ぎが大きくなる前に事態の収束を望んでいた。
「はい、ただちに現地のネゴシエイターに対して督促いたします」
そして、観光船事業の部長も同じ思いだった。

その数時間後。
アメリカ――国務省にて。
「ソマリアの海で襲撃されたクルーザーの状況は、どうなっているかね？」
国務長官の質問に対して、アフリカ担当の職員は手許の資料を見ながら答える。
「人質となっているのは観光客が十三人、船のクルーが五人のよう

です。観光客は全員がアメリカ人で、その内訳は、アトランタ在住のジョン・デイビス、四十七歳。その妻、マーガレット、四十五歳。三人の娘、ジニー、二十二歳。サマンサ、二十歳。タラ、十八歳。同じくアトランタ在住の未亡人、クラウディア・クーパー、五十三歳。その娘、シンシア、二十八歳。その夫、ロバート・ミリガン、二十八歳。また、リッチモンド在住のジェイムス・ハドソン、二十五歳。その妻、ベロニカ、二十四歳。さらにサウスキャロライナ州のグリーンビル在住のキャロリン・マッケリー、二十七歳。同じくグリーンビル在住のシンディー・ヒューイット、二十九歳です。全員が上流中産階級で大富豪は一人も含まれていません……」
「海賊による襲撃事件は大抵が身代金目当てです」
　危機管理のアドバイザーが付け加える。
「おそらく、この事件も数日後には解決しているはずです。状況を長引かせることは、クルージングドリーム社にとってはマイナスイメージを大きくするだけなので、いち早く身代金交渉を進めることでしょう」

　その三日後。
　ソマリア――ハーディオ地方にて。
「シェイク・ファラー、あんたの命令どおり、《青い珊瑚礁（ブルーラグーン）》号をディアリヌの港に繋留して、人質の方は砂漠のアジトへ移送する準備を終えたぞ」
「ご苦労だったな、アブドゥル軍曹！　ところで、クルージングドリーム社の方からは何か言ってきたかね？」
「まあな！　襲撃した翌日にはあったぞ。だが、少し早すぎる気がするな……。だいたい、このソマリアじゃ連絡を取るのだって、むずかしいはずなんだ！　まず、やつらは仲介者を見つけなくちゃならないし、それには時間がかかるだろう？」
　シェイク・ファラーの問いかけに、アブドゥル軍曹は気づかわしげに答えた。

「まあ、私は急がないよ！　すべてが済むまでは真の目的について、誰にも気づかれない方がいいからね！」
　その言葉を聞いた軍曹が驚いて聞き返す。
「あんたは観光客たちの身代金交渉を急がないのか？　白人の観光客十三人と乗組員五人、そして、豪華クルーザーなら、けっこうな金になるんじゃないかい！」
「いつ、身代金を取るなどと言ったかね？　そんな危ない橋は渡らないさ。とくに今は人質交換で身代金を受け取るのは、あまりにもリスクが大きすぎる！　彼らの政府が軍の特殊部隊を送り込んでくるかもしれないからね。ともかく、それはだめだ！　危険すぎるからな。それに、私には、もっと多くの大金を得る計画があるのさ！
　それもノーリスクでね！　人質どもを引き取りがっているのは何もアメリカ政府だけじゃないのさ。今、アラブやアフリカの裕福な連中にも話を持ちかけているところでね。あの連中、欧米の白人女に対しては尋常ではない興味を抱いていてな、その女たちを手に入れるためなら、いくらでも金を積むというやつらがごろごろいるのさ！」
　シェイク・ファラーはニヤリと笑いながら、そう言った。

翌日。
ソマリア――ハーディオ地方。
砂漠にあるイタリア人の古い要塞――バドリオ砦にて。
今にも壊れそうな古いトラックが砦の入り口を抜けて、四角い広場の真ん中で止まった。すぐに数人の武装している男たちがトラックを取り囲む。さらに別の男がトラックのホロを捲り上げると、荷台に座らされていた十三人の観光客に近づいてイタリア訛りの英語で話しかけた。
「よし、目隠しを取ってもいいぞ。足枷も外してやる」
　数分後には、アメリカ人観光客たち全員が摩耗しきった石畳の広場に並ばされていた。そして、イスラムの民族衣装――ジャラバを

身にまとった屈強な大男が、彼らの前に立って口を開く。
「この基地の隊長、アブドゥル軍曹だ！　『俺たちの国へようこそ』とは言い難いが、そんなに長く滞在することにもならないだろう！　だが、ここにいる間、おまえたちにはおとなしくしていてもらいたい！　おまえたちが、ここから脱走できるなどという夢物語を持つと厄介だから言っておいてやろう。この基地の周囲は、ジャッカルやハイエナ、そして、サソリや毒ヘビなんかがうじゃうじゃといる砂漠地帯だ。昼は灼熱、夜は極寒の大地となる！　とても、おまえたちだけで生きていけるような場所じゃないからな！　──それじゃ、男どもはアハメド軍曹と左の扉へ、女どもは俺と右の扉へ進め！」

観光客たちは抗議して、全員が一緒でいることを要求したが、誘拐者たちの手に鞭が現れたとき、彼らはただちに命令に従う決心をした。それで、男女別のグループに分かれた観光客たちは、それぞれの軍曹に後ろに付き従って砦内部へと入っていった。

アブドゥル軍曹に率いられた九人の女性たちは、今、大きな部屋の中で一塊になって震えていた。しばらくすると、そこにベールを被った数人の女性たちが現れる。
「やあ、ボーガー先生」
アブドゥル軍曹が、その中の一人に向かって陽気に声をかける。
「この白人女どもをあんたに預ける。こいつら全員をくまなく調べて、いつもの部屋に放り込んでおいてくれ。その後、俺たちは、これからのことについてシェイク・ファラーと話し合うことになっている！　それじゃ頼んだぞ！」
アブドゥル軍曹が部屋を去ると、後を託された中年女性が、ややきつめの調子で白人女性たちに向かって話しかけた。
「私は医師のサリマ・ボーガーよ。さて、あなたたちの左側の扉を見てちょうだい。そこはシャワールームよ！　今からシャワーを浴びて、ここにあるチュニックに着替えたら、この部屋に戻ってちょ

うだい。その後、あなたたちは医療スタッフによって健康診断を受けることになるわ！」
女性たちは裸を見られることに若干の困惑を感じたが、結局は衣服を脱いだ。乗心地の悪いトラックで不快な旅行をしてきた彼女たちにとって、『シャワーを浴びろ』という命令はとても魅力的なものだったのだ。
シャワーを浴びた後、九人の女性たちは下着と白いチュニックを身につけ、次々に控え室へ戻っていった。

第一話　海賊の人質（後書き）

この小説は海外の　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ（女子割礼妄想）小説を翻訳したもので、原作は　ｌａｉｒ－ｏｆ－ｈｏｒｒｏｒｓ．ｃｏｍ　というアダルトSNSの　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ　グループ„Ｎｅｗ　Ｅｍｂａｂａ„に投稿された　ｓｅｌｌｉｇ5　氏による、„Ｃｒｕｉｓｉｎｇ　ｏｆ　ｓｌａｖｅｒｙ„です。タイトルの『奴隷への航海』は原作タイトルのほぼ直訳です。

ｓｅｌｌｉｇ5　氏は„Ｎｅｗ　Ｅｍｂａｂａ„で三本の長編作品を投稿していますが、この作品は、その中でも一番最初に投稿されたものです。とても長い話なので最後まで翻訳するには相当時間がかかりそうです。とくに自分は飽きっぽい性格で一つのことをずっと続けられず、ｓｅｌｌｉｇ5　氏の他作品なども同時に翻訳を進めているので、なおさらです＾＾　話の続きは気長にお待ちください。あと、固有名詞ですが、中東・アフリカのメジャーではない地名や人名などは、ほとんど辞書に載ってないので、適当に音を当てたカタカナ読みです。

なお、翻訳した作品から推測するに、ｓｅｌｌｉｇ5　氏はフランスに在住するルーマニア人ではないかと思われます。原作は英語で書かれているのですが、ときどき、翻訳できない単語が出てきて、いろいろと調べてみると、それはすべてルーマニア語でした。また、„Ｃｒｕｉｓｉｎｇ　ｏｆ　ｓｌａｖｅｒｙ„の次作品に当たる„Ｔｈｅ　ｍａｎａｇｅｒ„や„Ｆａｔａ　Ｄｊｏｕｌａ„などにはパリを舞台にしたシーンが多数登場します。それと、ｓｅｌｌｉｇ5　氏は女子割礼以外にも、熟女、アナルセックス、黒人男性による白人女性支配……などの性的嗜好を持っているようで、後の作品には、そのようなシーンがてんこ盛りです＾＾　いずれ、翻訳する

ので、乞う、ご期待というところです！

第二話　恥辱の身体検察

ソマリア――ハーディオ地方。
砂漠にあるイタリア人の古い要塞――バドリオ砦にて。
シャワーを浴びて終えて、白いチュニックに着替えた九人の白人女性たちは、今、控え室で黙り込んだまま座っていた。
そこにボーガー医師が戻ってきて告げた。
「今から、あなたたちの健康診断を行うわよ。私たちは、あなたたちのうち、誰一人として病気になってほしくないの！　要するに、死んだ人間には、どんな価値もないということなのよ！　――じゃ、最初の人、私についてきて！」
「私が最初に行くわ！」
わずかにためらった後、マーガレット・デイビスは声を上げた。人質なった女性の中では自分が一番気丈な性格なように思えたからだった。
残り八人の女性たちに見送られたマーガレットは、女医に従って診察室への扉を抜けた。室内にはベールを被った老女が机を前に座っていた。彼女は、サリマや隊長よりもずいぶんと年上に見えた。さらに同じようにベールを被った年若い女性二人が部屋の隅の方で控えめに佇んでいた。
「さあ、チュニックと下着を脱いで！　それから、測定器具の前に行ってちょうだい。ここにやってきた初日の、あなたの体重と身長を記録する必要があるのよ……。ここでの短い滞在の間、あなたたちが大切に扱われたことを証明するためにね！」
この言葉によって、マーガレットは誘拐犯たちが人質を最高の状態で保ち、可能な限り短い期間で解放するつもりでいるということがわかったので、先ほどから大きくなっていた不安がやや解消された。彼女はチュニックを脱いで、下着も素早く取り去り、素直に女

医の指示に従った。
　しかし、身長と体重測定の後で、マーガレットはバストやヒップどころか、乳暈の直径や性器の細々とした寸法までも測られたので、再び、心の中に不安が広がりだすのを感じずにはいられなかった。
　ボーガー医師は、これらすべての数字を漏れなくカルテに書き留めていた。その間に、ベールを被った二人の女性が水をいっぱいに満たしたタライの前に跪くよう、マーガレットに手振りで示した。
それに従った彼女は、タライの内側に目盛りが刻まれていることに気づいた。しかし、その目盛りは奇妙にも一番上がゼロで底に向かっていくにしたがって数字が高くなっていた。
　二人の女性は、マーガレットの上半身を押し倒すようにして、タライの中へ彼女の乳房を沈め、その水を溢れさせた。そして、彼女は体を起こしたときに、今、為されたことの意味を正確に理解した。
「乳房の大きさを計ったの？　なんてことを！　こんなのは健康診断でもなんでもないわ。いったい、どういうつもりなの？　私たちをどうするつもりなの？」
　しかし、それに対する答えは誰からもなく、マーガレットはそのまま強引に婦人科診察椅子へと座らせられた。
「足をあぶみに入れて！」
　マーガレットが指示されたとおりに両足を婦人科診察椅子のあぶみに通すと、太腿が大きく開いて股間があからさまとなる。すかさず、ベールを被った二人の女性が陰裂から淫らにはみだしている小陰唇を目一杯広げ、さらに包皮を剥き上げて大きなピンク色の陰核亀頭を晒らけだした。
　年若い二人の女性は異様に発達した外性器を見つめながら、西欧人には意味不明な言語で何かを楽しげに話し合っていた。それは卑猥な女性器に対してナイフによる口づけが、どのようになされるべきかについての会話だったのだが、マーガレットにとって、とりあえずは幸いなことに、その内容は伝わらなかった！
　その後、ボーガー医師がマーガレットの膣内へ二本の指を挿入し

ながら尋ねる。
「子宮頸部で何か感じることができるかしら？」
さらに肛門検鏡とデジタル肛門検診器での検査の後、マーガレットは小さなマットの上で待機するよう命令された。そのとき、女性医師はロッカーの引き出しからカメラを取り出していた。
「いや、やめて！　裸の写真なんて撮らないで！」
「ファティマ！」
マーガレットが激しく抗議すると、ボーガー医師が年老いた女性にに向かって声をかけた。すると、机の前に座っていた女性が年に似合わぬ俊敏な動作で立ち上がり、手にした鞭を大きく振り上げた。それを目にした白人女性はただちに抗議をやめて服従する必要があることを理解した。
結局、マーガレットは、サリマの好きなように写真を撮らせた――正面から、側方から、背中から、さらには、医師の前で仰向けに横たわったところ、前屈して乳房が下へ垂れ下がったところ、しゃがみこんで二本の指で小陰唇を広げて大きな陰核を剥き出しにしたところ、四つんばいになって再びピンク色の肉芽を剥き出しにしたところ、先ほどの肛門検査時に塗られた油脂で依然として、てらてらと輝いている紫がかった放射状の蕾を晒すために両手で尻朶を広げたところ、などなど……。
このとてつもなく破廉恥で、そして、永遠とも思えるほどに長く感じられた写真撮影が終わったところで、ようやく下着とチュニックを身につける許可が与えられた。
ファティマが診察室の反対側のドアを開けて兵士を呼び込むと、マーガレットは残りの西欧人女性たちが待機している控え室の前を通らずに別室へと連行された。その後、健康診断を終えた女性たちが一人ずつ、この部屋へ連れてこられたが、肉体的にも精神的にも疲労困憊した様子で、誰一人として口を開く者はいなかった。
そして、九人全員が揃った後も、この奇妙な“健康診断„について話題にする者はいなかった。しかし、その場にいる誰もが、自分

たちが“通常”の身代金目的で誘拐されたのではないということを薄々感じ始めていた。

古い砦に夜の帳が訪れたとき、サリマ・ボーガー、ファティマ、そして、アブドゥルの三人がシェイク・ファラーの前に集まっていた。

「九人の白人女性は全員が売り物になりますわ！」

女医が断言する。

「全員、どのような傷害もなく、いかなる疾病にもかかっていません！　また、驚くべきことに最年少のタラは、まだ処女でしたわ！」

「それはいいね。きっと高値がつくことだろう。それで割礼については、どのように行うか決めたかね？」

「はい。白人女性たちの外性器を念入りに検査した結果、彼女たちには、それぞれ、以下の処置を施すことを提案いたしますわ」

ボーガー医師は手にしたカルテに視線を向けながら続ける。

「タラと最年長のクラウディアのみ、クリトリスとラビアを切り取り、陰門封鎖するファラオニック割礼を施しますわ。残りの者たちについては、全員、陰門封鎖する必要はないでしょう。とくにシンディーとベロニカですが、二人の外性器は思春期前の少女のような形状を未だに保っています――切除するのはクリトリスだけで十分です。キャロリンと、そして、クラウディアの娘――シンシアの二人も、まあ、クリトリスだけ切り取ればいいでしょう。そして、マーガレットと二人の娘たち――ジニーとサマンサですが、この三人については、クリトリスを切除するだけでなく、その発達しすぎたラビアも同時に切り取るスンナ割礼を施しますわ」

「なるほど……。まあ、先生の思うとおりに進めてもらってかまわないよ」

シェイク・ファラーは鷹揚に答える。

「それではさっそく、未来の買い手たちに知らせないといけないな！　バータンレ宗教学校で奴隷オークションを開催するということ

と、そこで行われるだろう素晴らしい割礼ショーのことを！」
「バータンレ宗教学校ですって？　イスラムの神学校で割礼を行うんですか？　でも、どうしてです？　女性割礼はアラブの慣習ではなく、エジプトに住むキリスト教徒のコプト人やアフリカのアニミズム信者たちが行うものですわ」
サリマが意外そうな表情を浮かべて尋ねた。
「まあ、そうなんだが、今、バータンレ宗教学校では欧米諸国に対する聖戦のために多くの戦士たちを養成してる最中でね。それで、その若者たちに白人の女どもが素っ裸に剥かれて豚のように切られるところを見せてやることで、彼らの士気を高揚させようっていう話なんだよ。この素晴らしいショーを“学生”たちのために催すにあたり、バータンレ宗教学校のイスラム教指導者たちは、私たちに大金を支払ってくれることになっているのさ」
「白豚どもを切って、大儲けというわけですか！」
アブドゥルが嫌らしい追従笑いを浮かべながら言った。
「そうだよ、軍曹。白いメス豚を商売に利用すれば、何かと儲かるんだよ！　割礼ショーでがっぽり！　そして、奴隷オークションでがっぽりだ……。まったく笑いが止まらないね」
さも嬉しそうにそう答えたシェイク・ファラーは、実際に声を上げて笑いだした。

第三話　公開割礼の宣告

四日後。
ハーディオ地方――バータンレ宗教学校にて。
今、九人の白人女性たちは砦から少し離れた大きな施設へと連れてこられ、学校の教室のような場所に閉じ込められていた。そこそこ広い部屋にもかかわらず、全員が壁際の方に寄りそうようにして固まっていた。
一方、同じ室内の反対側には、アブドゥル軍曹、ボーガー医師、ファティマの三人がいて、西欧人にはわからない言語で何やら話し合っている。さらに二組のグループの間には鞭を手にした屈強な兵士たちが数人たむろしていた。
「よく聞けよ、女ども。おまえたちに伝えることがある」
突然、アブドゥル軍曹が女性たちに向かって話し始める。
「おまえたちは身代金目当てで誘拐されたんじゃない！　俺たちは、そんな危ない橋は渡らない。もっと利口な儲け口があるからな。アフリカや中東の金持ちどもは西欧人の白人奴隷を喉から手が出るほどほしがってる！　そんな奴隷を手に入れるためなら、どんな大金でも用意するつもりでいるんだ！　つまり、おまえたちは、これから奴隷オークションで、そういった連中に対して競りにかけられるわけだ！」
ただちに女性たちから多くの叫び声があがり、抗議の言葉が発せられるが、鞭を振るう凶暴な音が彼女たちに対して無言を強制する。
「ただし、買い手たちには、ちょっとした購入条件がある！　そのため、おまえたちはオークション前に割礼を受けなくちゃならない！」
「割礼？　どういうことかしら？」
クラウディアが驚いたように口を開く。

「割礼は男性に対して行われるものだわ！」
「――そして、女に対してもだ」
アブドゥルが笑いながら答える。
「そうだな……。白人どもの国じゃ、こう呼んでいたな――たしか
“女性器切除”と言ってたかな！」
「女性器切除ですって！　そんな……」
九人の女性たちが一斉に騒ぎ立てる。
「なんて野蛮なことを！」
「私たちは、そんな割礼なんて受けないわ」
その騒ぎの中、軍曹が女性医師に対して目配せする。
「黙りなさい！」
サリマが大きな声を出して、白人女性たちを怒鳴りつける。
「割礼を受けたくないというのなら、鞭で打たれることになるけど、
それでもかまわないのね？　鞭の洗礼は、あなたたちにとって耐え
難い苦痛に満ちた、とても不愉快なものとなるはずよ！　あなたた
ちが、あそこにナイフの口づけを感じるとき、それはただ一瞬の痛
みをもたらすだけで済むけど、鞭でつけられた傷は数日間にわたっ
て藻掻き苦しむほど酷く辛いものよ」
その言葉と同時に鞭を持った兵士たちが威嚇するように女性たち
へ近づく素振りを見せる。そのとたん、西欧人たちは全員、顔色を
青ざめさせて押し黙る。
「さあ、わかったら、私の指示に従うのよ。――まずは、あなたた
ちの外性器から陰毛を剃り落とさなければならないわ。それが済ん
だら、麻酔効果のあるクリームをクリトリスとラビアに塗ってあげ
るわ！　ほら、さっさと着ているものを脱いで！」
もはや、その残酷な運命から白人女性たちが逃れる可能性は皆無
だった。それで、誰もが諦めの境地でチュニックを脱いだ。そして、
ほんの少しの間だけ躊躇した後、パンティーも取り去った。
「ブラジャーもよ」
上半身の下着を取り去っていない女性たちに対して、サリマが叱

咤する。
「あなたたちは全裸で剃毛されるのよ！　さあ、最初の人、早く台に乗って！」
一番最初にキャロリンが横長の台の上に横たわる。すると、二人の兵士が近づいてきて、両足を強引に広げた。赤毛に覆われた股間が晒けだされると、ファティマが恥丘と大陰唇を丁寧に剃毛していく。そして、その作業が終わると、ボーダー医師が再び命じる。
「さあ、四つんばいになって！　お尻を上げてちょうだい！　買い手にはアナルセックスをご所望になるお客さまもたくさんいらっしゃるんだから、肛門の無駄毛もきれいに処理する必要があるのよ！」
一通りの剃毛が済んだ後、キャロリンは台の上でしゃがむように指示された。その姿勢をとると、大陰唇の隙間が自然と広がり、陰核と小陰唇にクリームを塗りつけることが容易となるのだ。
「さあ、次の人も剃毛するわよ。早くして！」
そのようにして、九人の白人女性たちは次々に剃毛され、また、台の上にしゃがまされ、外性器にクリームをも塗り込まれていく。
「前の人のようにしゃがんで！　麻酔性のクリームは数分以内に作用するわ。これは割礼時の痛みをある程度緩和させるものよ」
白人女性たちは自分の番が巡ってくるまでの間、視線をあらぬ方に向けたり、床に落としたりして、誰もが処置を受けている最中の犠牲者を見ないようにしていた。そして、自分の順番が回ってきて、実際にその処置を施されると、全身がぞくぞくとするような感覚に襲われ、しだいにじんわりとした暖かさを下腹部で感じ始めるのだった。
キャロリンも自分の股間で何か奇妙な感覚が芽生えつつあることに気づいた。何気なく、その部分へと視線を落とした彼女は激しいショックを受けた。なんと、自分の陰核が、その包皮の下から完全に飛び出しており、淡いピンク色をしていたはずの亀頭が赤紫に変色して異様に大きく肥大しているのだ――まるで男性器の先端部のように大きく膨らみ、小陰唇の間から不気味に突き出ていた！

今しがた、西欧人女性たちの敏感な箇所へ塗布された麻酔性クリームには、明らかに催淫効果のある成分も含まれていたようだ。そうでなければ、その部分が、これほど急激に充血して勃起した理由の説明がつかない。
しばらくすると、ボーガー医師がキャロリンのもとにやってきて、充血して異常に大きくなっている陰核に触れ、嫌味っぽい忍び笑いをもらしながら批評した。
「ずいぶんと性的に興奮しているようね？ もうすぐ切り取られるというのに、とても大きく勃起しているわ！ 本当に呆れ返るわね。もうすぐ、その大きなプラムを摘み取られるっていうんで、性的に高ぶっているのかしら？ あなた、この淫らな器官を本当に切り取ってほしいみたいね？ それにしても、これを切り取ったら、とても立派な〝記念品〟になると思わない？」
「……！」
キャロリンは恐怖に満ちた目を大きく見開いて、性的な覚醒と渇望によって、大きく勃起しきった陰核が包皮をめくり返し、小陰唇の間から突き出ている様を眺めていた。
「そろそろ頃合いね」
他の白人女性たちの性器の状態も確認して回った後、ボーガー医師は満足の笑みを浮かべながら告げた。
「あなたたちの〝もの〟は完全に切り取られる準備が整っているわ！ さあ、ブラジャーを着けて、私たちと一緒に割礼ショーの舞台へと行きましょうか！ あなたたちのショーは、きっと素晴らしいものになるに違いないわ！」
「割礼ショーって……！？」
マーガレットが慌てて尋ねる。
「ここで切られるんじゃないの？」
「もちろん、違うわよ！」
アラブ人の中年女性は含み笑いをしながら答える。
「白人女性の割礼は、いつも公開の場で行われるのよ！ それが本

当に行われたことを証明するため、可能な限り多くの立会人を必要とするからよ！　もちろん、あなたたちの買い手だって、それを見たがっているわ」
「そ…、そんな……！」
女医の言葉を聞いた女性たちがまた騒ぎ出す。
異常に大きく膨れあがっている陰核を大勢の観客たちの前で嘲笑の的となる猥褻な展示物として晒さなければならないという耐え難い屈辱を受け入れるなど、とてもできようはずがなかった。
「う…、嘘でしょう……」
「いやよっ！　そんなの！！」
それに対して、ボーガー医師も険しい表情を浮かべて再び大声を張り上げる。
「静かにしなさい。――どうしても拒むというのなら、公開割礼を受け入れるまで、大勢の見物人を前にして鞭で打たれ続けることになるのよ。どうせ最後には同意することになるんだから痛い思いをするだけ損よ」
またしても白人女性たちは顔面を蒼白にして沈黙する。彼女たちには選択の余地がほとんど残されていなかった。どう抗ってみたところで、この過酷な運命のから逃れる術はないのだ。
「でも、どうして、ブラジャーを着ける必要があるの？」
マーガレットが口にした疑問に、サリマは打ち解けたような冗談っぽい調子で答える。
「それはね、あなたたちの大きなプラムだけに観客の視線が釘付けになるように、もう一つのセックスシンボルである乳房を隠してもらうためよ。だから、とりあえず着けてもらうだけよ！　あなたたちが切られるときには取り去ってもらうわ！　白人女性への割礼は全裸で施すっていうのが決まり事だから！」
そう言われた九人の女性たちは、みな無言のままブラジャーを身に着ける。そして、全員の準備が整うと、サリマ・ボーガー医師は大講堂に通じる扉を押し開けた。

「さあ、行くわよ……。ここに戻ってくるときには、みんな、わずかにだけど、体重が軽くなっているはずよ！」
　女医は、本人にはまったく似合わぬジョークを口にしながら、白人女性たちに移動を促すのだった。

第四話　割礼ショーの開幕

ハーディオ地方――バータンレ宗教学校にて。
大講堂の扉が開かれると、そこからファティマが進み出てステージに上がった。立錐の余地もなく講堂内を埋め尽くす宗教学校の〝学生〟――未来の聖戦士たちが一斉に喝采の声をあげる。
また、最前列の席にはアフリカ、あるいは中東の民族衣装で着飾った裕福そうな男たちが陣取っていた。彼らは自分自身のハーレムを有している首長や奴隷オークションのバイヤーたちだった。
「親愛なる買い手のみなさま、そして、敬虔なるバータンレ宗教学校の生徒のみなさん。これより、とても素晴らしい、また、きわめて見応えのある割礼ショーをお楽しみいただきます！　しかし、それをお楽しみいただく前に、まずは、これから割礼を施されることになっている九人の白人女性たちの淫乱な姿をお目にかけましょう！」
ファティマが口上を述べると、講堂内のあちらこちらから笑い声と拍手が巻き起こり、誰かが大声を張り上げる。
「白人どもはドラッグやセックスにおぼれ切っている堕落しきった豚だ！」
それに大きく頷きながら老女は続ける。
「そのとおりです！　みなさんは、じきに、それが真実であるということを知るでしょう。白人女性は信じがたいほど淫乱であり、自身の恥ずべき欲望への中毒症状を常に露わにしています！　そう、これから、ご覧いただく九人の白人女性たちは切られようとしている今、この瞬間でさえも、自らの裸体を見知らぬ多くの男性たちの目に晒すということで、性的な興奮を覚えています！　したがって、白人女性が奴隷となるときに、悪の芽を摘み取って、彼女たちを貞節と慎み深み人生へと導くことは、私たちの大いなる義務でもある

のです！　この割礼ショーは、聖戦を戦う勇者たちとアラブの人々にとっては、堕落しきった異教徒の西欧人に対する至高の勝利です！　そして、アフリカ人の買い手のみなさまにとっては、何世紀にもわたる奴隷制度に対する甘美な復讐です！　さらに、割礼ナイフにとっては、悪魔の肉に対する裁きの時です！　――それでは、本日のショーに出演する白人女性たちに入場してもらいましょう！」

　ファティマが大仰な身振りで自分が入ってきた扉の方を指し示すと、それまで好き勝手に騒いでいた〝学生〟たちが一瞬にして静まる。そして、彼らの期待に満ちた視線が講堂の出入り口へ向けられている中、そこからブラジャーだけを身に着け、それ以外は裸の白人女性たちが連れだされてきた。

　二十歳前の少女から五十歳過ぎの熟女まで、九人の西欧人女性たちは、そのままステージに上げられると、後ろ手に組まされて観客と向かい合うよう一列で横並びさせられた。講堂内にいる全員の目がパンティーを履いていない女性たちの下腹部へと無意識のうちに向けられる。

　つい先ほど剃毛されたばかりで真っ白な肌を晒している恥丘の真下――ねっとりと開いた割れ目の上端から異常に大きく膨らみ、赤紫色がかった器官があからさまに飛び出している様子を誰もが目にすることができた。

「今、みなさんは自分の目で確かめることができます！」

　ファティマが高らかに叫ぶ。

「ご覧になってわかるとおり、西欧人女性は慎み深さとはまったく無縁です！　彼女たちは男性と向かい合うとき、たとえ、それが見知らぬ相手であろうと、たちまち性的に興奮し、このように人目もはばからず、悪の芽を淫らに、そして、大きく膨らませています！

　これこそが西欧人女性が性的な悪癖の習慣に染まりきっている証しです！」

　そこまで老女が語ったとき、突然、講堂内の静けさが破られ、拍手喝采と抱腹絶倒、そして、淫らな四文字熟語を連呼する喧噪の渦

が巻きおこった。
　ステージ上には女性を座らせるための婦人科診察椅子などは用意されていなかった。その代わりに木製の丸テーブルと丸椅子、そして、小さな四角いテーブルだけが配置されていた。四角いテーブルの上には思わずゾッとさせられるような鋭く尖った金属製の道具類や西欧人女性たちから切り取った“記念品”を仕舞うための銀製の小箱などが整然と並べられていた……。
（これは夢なんかじゃないわ！）
　それらを見つめながら白人女性たちは誰もが思った。
（本当に切り取られるんだわ！　見せ物として、ここにいるすべての人々の目の前で性器を切られるんだわ！）
　数分後、講堂内のざわめきが一段落すると、ボーガー医師が白人女性たちに向かって指示を飛ばす。
「さあ、あなたたち、丸椅子の後で左側から順に一列に並んで。まずはマーガレットよ。続いてジニー、サマンサ、シンシア、ベロニカ、キャロリン、シンディー。それから、ショーの真打ちとして、タラとクラウディアよ！」
　その指図に従って白人女性たちが横一列に並び終えると、女医がマーガレットの腕を取って引き寄せながら告げる。
「それじゃ、あなたからよ！　まずは、お客さまに切られる前の状態をよく見ていただくためにステージの前へ出なさい。剃毛したおかげで、あなたの股間で真っ赤に色づいた二枚の花びらが大きく咲き誇っている様子がとてもよくわかるわ！　そして、その花びらの真ん中には赤紫色に染まっている大きな雌しべがあるわね！　それらをもっとよくお客さまに見ていただきましょうか！」
　ボーガー医師にしては珍しく修辞的な言い回しだった。そして、その命令にも等しい指示を受けて、マーガレットが諦めの境地で無言のままステージの前方へと進み出ると、今度は具体的な所為を指図してくる。
「さあ、膝をがに股に開いて、腰を前の方に突き出して、手で大陰

しなさい！」
マーガレットは大きく息を吸い込んで目を閉じると、サリマの言葉に従って、膝を左右に開くようにして曲げ、下半身を客席に向けて淫らに突き出した。それから、数多くの淫らな視線が自分の最も秘密な部分へ注がれているのを意識しながら、両手をゆっくりと下ろして鼠蹊部にあてがうと、白魚のような指に対して破廉恥極まりない所作を行わせる。
同時に、再び講堂内が卑猥な喧噪に包まれる。
「——そうよ。そのまま、親指で包皮も捲り返して！ ——もっと指に力を入れて。付け根まで晒けだすのよ！ そうそう、もうすぐ切り取られるクリトリスが性的興奮で、どれだけ充血しきっているか、そして、どれほど大きく膨らんでいるか、お客さまによく見ていただくのよ！」
マーガレットがアラブ人の女医に言われたとおりにすると、講堂内の喧噪がさらに高まる——淫乱な白人女性に対する軽蔑と罵倒の嵐だった。
(ああ……。みんなが見てるのね)
この信じがたい現実に、マーガレットは小刻みに身震いする。
(夢じゃないんだわ。今、あそこに自分の指を感じているわ！ そして、割礼されるときも何をされるかを感じるんだわ。もうすぐ、この指に代わってナイフの刃を感じるんだわ！ 苦痛が本当に一瞬で終わればいいのだけど……)
いつの間にか、丸椅子に腰を下ろしていたボーガー医師が、マーガレットに向かって大きな声で命じる。おそらく、観客にも聞かせるための大声なのだろう。
「それじゃ、こちらに戻ってきてちょうだい！ それで、ブラジャーを取って、この丸テーブルに上がって！」
少しためらった後、マーガレットはブラジャーを外して木製の丸テーブルの上に乗ると、下半身を客席に向けて仰向けに横たわった。

講堂内のあちこちで失笑が漏れる。さらにサリマも呆れたような微笑みを浮かべて言う。
「違うわよ。四つんばいになってお客さまの方を向くのよ！　お客さまは、あなたが割礼を施されている間、どんな顔をしてるか見ていたいのよ！」
女医は、身を返して四つんばいになったマーガレットの膝を大きく広げさせ、その顔を上げさせて大きな乳房の先端がテーブル面に接するほど上半身が上ぞりとなるような姿勢を白人女性に強いた。
マーガレットは、このような姿勢を取れば、肉色をした谷間が全開となり、小陰唇が陰裂から大きくはみだし、巨大な陰核が震えながら屹立している様子があからさまに見て取れるだろうことも自覚していた。
そして、サリマが木製テーブルの縁を軽く押すと、マーガレットを乗せた円台がぐるりと一八〇度回転し、彼女の下半身は観衆に向けて晒けだされた！　西欧人女性たちは全員、木製の丸テーブルに、このような仕掛けが施されていようなどとは夢にも思っていなかった。
そのようにして、マーガレットの太腿の間で屈辱的な性的覚醒の兆候を露わにした性器が観衆に披露されると、熱狂する人々で溢れかえった講堂内に、再び拍手喝采と大歓声が巻き起こった。
ファティマが木製テーブルの傍らまで歩み寄ると、紫色がかった巨大なプラムの弾力性と湿気を確認するかのように、それを人差し指と親指で摘んでみせた。同時に観客席に向かって、ショーの最初の見せ場が到来したことを大声で告げる。
「親愛なる買い手のみなさま、そして、敬虔なるバータンレ宗教学校の生徒のみなさん！　いよいよ、姦淫への誘惑をもたらすこの罪深い悪の芽と、そして、淫らに咲き誇っている、この卑猥な花びらを摘み取る時です！」
（ついに割礼を施されるんだわ……）
マーガレットは覚悟を決めた。

「さあ、卑猥な西欧人の雌豚、とうとう、おまえさんに悪癖をもたらしてた淫らな悪の芽に別れを告げる時がやってきたよ！　おまえさんは、それに『さようなら』するため、最後のささやかな愛撫を受けたいかい？」

ファティマが残酷な笑みを浮かべながらマーガレットに小声で尋ねてくる。しかし、彼女は無言のまま首を横に振るだけだった。

第五話　マーガレットの割礼（前編）（前書き）

【警告】本文中には女性に対する猟奇的な虐待を克明に描写しているシーンが多々あります。人体切断（具体的には性器切除）や流血の類が苦手な方は閲覧を控えてるようにしててください。

第五話　マーガレットの割礼（前編）

ハーディオ地方――バータンレ宗教学校にて。
天井の照明が落とされ、講堂内が薄暗くされる。同時にステージ上で何台かの投光機が点灯された。そのうちの二台は丸テーブル上で観客と向き合うように両肘で上半身を支えながら跪いている素っ裸の白人女性を照らしだしていた。
一台の投光器が正面から女性の青ざめた顔と豊かな乳房を薄闇の中に浮かび上がらせ、もう一台が後方からボーガー医師の〝ターゲット〟に対してビームを収束させていた――巨大な赤紫色の陰核が重ね合わされた小陰唇の間から屹立している様子がはっきりと見定めることができた。
他の投光機はブラジャーだけを身につけた八人の西欧人女性たちを向けられていた――ライトの斜光ビームは、割礼を施される順番を待つ彼女たちの完全な勃起状態で際だっている陰核の状態をあからさまに照らしだしている。
講堂内は静まり返っていた。女性医師が用意する金属製の割礼道具のカタカタという音だけが響いていた……。そして、今まさに、四十五歳のマーガレット・デイビスは公開割礼によって性器を切られようとしているところだった。
ジニーは、ブラジャーを身に着けただけで立ち尽くす他のアメリカ人女性たちと一緒に、素っ裸で四つんばいのまま、陰核切除という試練の瞬間を静かに待ち受ける母親の後ろ姿を見つめていた。このとき、彼女は母親の陰核を初めて目にしたが、その異様に膨れあがっている器官から視線を逸らすことができなかった。
（……そして、これで見納めなのね！）
娘は母親の股間を悲しげに見つめる。
（ママの〝もの〟が、こんなに大きかったなんて！　あの変なクリ

ームなんか塗られなくても十分な大きさがあったのね……。でも、もうすぐ、ママは“それ„を永遠に失ってしまうんだわ……）
ジニーは自分自身の陰核が身震いするように小刻みに脈動するのを感じる。
（……そして、ママが終わったら、次は、私の番！　次に、あのテーブルの上に乗せられるのは、私自身なのよね！）
それまでの時間が永遠とも感じられるジニーだった。
マーガレットは大きく膨れあがったスモモのような陰核を自ら進んでサリマに捧げるかのように、ゆっくりと膝を広げながら腰を突き上げて上半身を反らせる。その卑猥な動作から講堂内の観衆もステージ上の女性たちも視線を逸らすことができないでいた。
「白人女が腰を突き上げて自分から割れ目を突き出してるぞ！」
「切り取られるのを待ち望んでんだよ！」
そんな野次が観客席のあちらこちらからもたらされ、それに呼応するように嘲笑がさざ波にのよにう広がる。
ジニーは、女医が細くて刃がやや湾曲した小さなナイフを取り上げ、それをほとんど透明な液体に浸す様子を詳細に観察することができた。
（いよいよ……）
ジニーは女性医師の手元を見つめた。
（……始まるのね！　一番最初に切られるのがママで、私たちも全員、その後、すぐに切られるのね！）
マーガレットは、自分の股間で、サリマの指が小陰唇の片方を摘んだのを感じたとき、小さく息を呑んで顔を強ばらせた。そして、恐怖によって大きく見開かれた瞳と声なき叫びを発するように広げられた口許を誰もが見ることができた。
ボーガー医師は膣口の右側にある小陰唇の上端から陰核包皮につながる下方へ向けて刃を少しずつ動かし始める。その刃はジュージューと音を立てて白い煙を発しながら肉を断っていく。女医は少し切り進むたびに、その刃を液体に浸していた。

断ち切られている小陰唇からの出血は、それほど多くはなかった。
（あの液体は、たぶん強酸性のものね）
ジニーは、その酸鼻な光景に眉を顰める。
（それで傷口を焼灼してるんだわ！）
マーガレットは自分の股間から小陰唇をゆっくりと切り離している刃の動きを感じ、目を大きく見開いて真正面を見つめながら、そして、口を大きく開けたまま、荒い息を繰り返していた。
大人数が収容されているにもかかわらず、講堂内はとても静まりかえっていた。響きわたる唯一の音はテーブルの端に設置された小さなマイクが拾ってスピーカーから流されるマーガレットの掠れ声と引き攣った息遣いだけだった。
右側の小陰唇を切り離した後、サリマは左側の小陰唇も同じようにして切り離していく。今や、二枚の肉襞は陰核包皮によってのみ、白人女性の体と繋がっている状態だった。最後に、その包皮の周りで刃を半円状に滑らせると、それらをまとめて陰門から剥ぎ取り、老婆へと手渡した。
ファティマは二つの花びらが蕚によって繋がっているような形状をした肉片を、拍手喝采する観客たちに向けて高々と掲げてみせた——それを見た会場内の人々は、ますますヒートアップしていく。
（これじゃ、まるで男の子にするような割礼じゃない！）
ジニーは困惑しながらも、完全に剥き身にされてしまった母親の陰核を凝視し続ける——それは、まるで赤紫色をした太くて短い棒が突き出ているようだった！
ファティマは白人女性から切り取った小陰唇と陰核包皮のひと連なりを銀製の小箱の中に納めると、それらを失ったマーガレットの性器を観衆に晒すため、テーブルをぐるりと回転させた。結果的に、それはマーガレットと他の白人女性たちを向き合せる形となる。
ジニーは、母親の大量の汗にまみれの顔と恐怖におののく瞳、そして、呼吸するたびに大きく震える巨乳を目の当たりにした。老婆がテーブルを再び回転させる前に、女性たちは、一瞬、視線を交わ

し合う。
　再び、マーガレットが陽気に浮かれて騒ぎ立てる観衆と向かい合わせにさせれると、その膨張限界まで膨れあがっているかのような赤紫色の器官が刃への捧げ物となるべく、ボーガー医師の前に晒された。
（いよいよ、クリトリスが切り取られるのね）
　ジニーは無意識のうちに全身を震わせていた。
（ママの性的な快楽の終焉……！）
「さあ、いよいよ、罪深き悪の芽を刈り取る時です！」
　そう叫ぶファティマの声が講堂内に響きわたる。

第六話　マーガレットの割礼（後編）（前書き）

【警告】本文中には女性に対する猟奇的な虐待を克明に描写しているシーンが多々あります。人体切断（具体的には性器切除）や流血の類が苦手な方は閲覧を控えてるようにしててください。

第六話　マーガレットの割礼（後編）

ハーディオ地方——バータンレ宗教学校にて。
ファティマがマーガレットの耳元で何かを囁いている。ジニーはテーブルの端を掴んでいる母親の手が震えているのに気がついた。
講堂内は再び静まり返っている。
肉の花びらを取り去られたことによって、巨大な紫色がかっている雌しべは、今や、容易に摘み取ることが可能な状態だった。そして、サリマ・ボーガーが親指と人差し指で、それを摘むと、マーガレットは低い呻き声を漏らした。
（麻酔性のクリームを塗られていても……）
ジニーは、そんな母親の醜態を見つめながら思う。
（……刺激されたら感じるのね！）
ジニーは、女性医師が左手で摘んだ大きな肉芽を強く引っぱり始めると、母親が苦悶の声を漏らしながら、背中と太腿の筋肉に力を込めて体を弓形に反らしていくのを見た。
サリマは先ほど使った小さなナイフを再び取り上げると、その刃を酸性の液体に浸す。それから、陰核の付け根に対して、おもむろに刃先を突き立てた——その瞬間、マーガレットが体を激しく震わせる。だが、女医はまったく気にかけずに、まるで野菜の皮でも剥くかのように器官の外周をゆっくりと切り進み、周囲の組織から切り離し始める。
（あの医者は、いったい何をしているの？）
ジニーは女性医師の作業を不思議そうに眺めていたが、その意味を理解したとき、無意識のうちに体を震わせた。
（なんてことなの……！　ただ切り取るんじゃなくて、体の中に埋まってるところまで抉り取ろうっていうの？）
細心の注意が払われたナイフの動きが繰り返されるにつれて、女

医の指の摘まれた陰核は少しずつ体外へと引き出され、その芋虫状の内部器官をしだいに露わにしていく。ナイフが切り進む間、マーガレットは歯を食いしばって必死に悲鳴を堪えようとしていたが、刃が前後に律動するたびに、激しい喘ぎを途切れさせて大きな叫び声をあげていた。

（ママったら……）

ジニーは困惑した表情を浮かべる。

（……まるでセックスであげる嬌声みたいじゃない！）

マーガレットの反応は、じつに刺激的だった。弓形に反らされた汗まみれの体、大きく勃起しきった乳首、艶めかしく開かれた口許、そして、そこから断続的に発せられている喘ぎ声……。今や、彼女は性交中の女性とまったく変わらない姿態を晒していた。

講堂内を埋め尽くす人々の間に嘲笑と揶揄するような会話の波が広がっていく。

「なんて破廉恥なの！」

ナイフの刃先を酸性の液体に浸しつつ、女性医師が見下したような笑みを浮かべて囁く。

「衆人環視の中で、クリトリスを切り出されているというのに、あなたは性的に興奮してるようね？　どうやら、この割礼ナイフが本当に愛おしいようね？」

そんな言葉を投げつけられたマーガレットは、女医が動かすナイフによって与えられている苦痛、恐怖、屈辱、興奮――それらの混沌の中で、これまでに一度も感じたことがない、飛び抜けて奇妙な感覚に襲われて、さらに大声で叫びだすのを抑えることができなくなりつつあった。

ナイフの鋭い刃が恥骨上部に繋がる靭帯を切断すると、サリマが左手で摘んでいた陰核はその自由度を一気に増し、勃起組織が二股となって左右に分岐する部分までを体外へと引きずり出されてしまう。だが、自らの職務に忠実な女性医師は、そこで手を休めることなく、スポットライトの明かりの下に晒けだされている根の、さら

に奥深い部分をも鋭利な刃先で浚い続ける。
　その様を見た白人女性たちは、全員が顔を青ざめさせ、恐怖に打ち震える。
（嘘でしょう……。あんな深いところまで切り取るなんて……）
　ジニーは母親に施されている処置――そして、次に自分が施されることになる処置が割礼というよりは、ほとんど外科手術に近いのではないかという恐れを抱いた。
（あんなふうに切られてしまって、麻酔クリームを塗布されただけで、痛みに耐えられるのかしら……？）
　ボーガー医師が巧みに扱うナイフの動きが早まるにつれ、マーガレットの漏らす喘ぎ声もしだいに激しさを増していく。そして、ナイフの切っ先が、女医が納得できる部位――長い肉根の末端にまで達したとき、左右の陰核脚の各々が鈍い断裂音を発して恥骨弓から完全に切り離される。
　そこで一旦、ナイフの動きを止めたサリマは、大きなプラムをしっかり握り締め直すと、その実をもぎ取るような手つきで、ぐいっと勢いよく引っぱった。すると、マーガレットが「ああーっ！」という、これまでにないほど大きな悲鳴を発して、無意識のうちに腰を高く突き上げた。
　ジニーは二つの尻尾を有する奇形腫の芋虫のような肉塊が陰裂上部に丸く開口する小さな穴から、ずるっと体外へ引きずり出され、それら陰核器官のすべてが母親の股間から女医の左手の中へと移動していくのを見て、大きく息を呑んだ。
　サリマの掌にある肉塊には、それ自身が抜き出された開口部の中から長く引き伸ばされている繊維状組織が繋がっているままだった――要するに、マーガレットの性感中枢部は陰核神経のみで体に繋がっているだけだった。
「いよいよ、クリトリスと、そして、オルガズムに永遠のお別れよ。覚悟はいいかしら？」
　マーガレットに囁くようにして“最後通牒”を告げたボーガー医

師は、ゆっくりと時間をかけつつ繊細な神経繊維を引き伸ばしていく。そして、それが千切れる寸前まで伸びきったと判断したとき、右手に持つナイフの切っ先を丸く開いた穴の中へ差し込んでいき、ぴーんと張り詰めている陰核神経の付け根に刃をあてがった。
サリマは静まり返った講堂内に視線を巡らせて、大勢の立会人に向かって頷いて見せた。それから、満を持して、ナイフを握る右手首を勢いよく振って鋭い刃を一閃させた――その瞬間、マーガレットは目前で幾千もの星が煌めいて意識が真っ白に染まった。全身が痙攣を起こしたように細かく震え、豊満な乳房が勢いよく跳ねた。
「あああああああああああああああああ…………………」
彼女は頭を後方に大きく仰け反らせて大きく開いた口からは永遠に続くとも思えるような長い叫び声を発し続ける――快楽のないオルガズム、純粋に生理的反応によるオルガズム、敏感な神経組織を切断されることによるオルガズム、そして、人生で最後となるオルガズム……。
切り離されたばかりの、まだ生暖かさが残る白人女性の快楽器官をボーガー医師から受け取ったファティマは、血液の供給を断たれて、やや萎んでしまった陰核亀頭を親指と人差し指で摘むようにして持ち上げると、先に見せびらかせた小陰唇と同じように、ステージ上で高く掲げ、陽気に騒ぐ群衆に向かって振りかざしてみせた。
「さあ、ご覧になってください。この罪深き悪の芽の大きさを！」
一方、ジニーは母親が体を激しくよじらせている姿を恐怖に満ちた思いで見つめていた。空っぽにされた割れ目、断続的に収縮を繰り返している肛門、激しく揺れ動いている大きな乳房――そのすべてに自分の姿を重ね合わせていた。
ファティマが完全な割礼を施された女性器の眺めを観衆に与えるため、再びテーブルを回転させる。ジニーは母親の顔を目で捉えた瞬間、その見る影もなくやつれた酷い顔つきに、とても驚かされた。今にも気絶しそうな朦朧とした瞳、汗にまみれた顔面に張り付いている乱れ髪、荒い呼吸を繰り返して大きく開いた口許……。

マーガレットから切り取った小陰唇を納めてある小箱に、同じく切除したばかりの陰核を収納したファティマは、割礼を施された西欧人女性の外性器に少女のような見映えを新たに形作るため、左右の大陰唇を引き寄せて割れ目を閉じ合わせた。だが、発達しすぎた陰核と小陰唇で長い年月にわたり、ずっと分かたれていた大陰唇は閉じ合わせようとしても一筋の割れ目として留まることができなかった。
「無駄よ、ファティマ！　これを使いましょう」
女性医師は苦笑いを浮かべながら告げると、小さな机からリングの一部分が欠けたように見える小さな丸いクリップを三つほど取り上げて、不作法な大陰唇が閉じ合わされた状態を保てるように、割れ目を挟むようにして、その上端付近、中程、下端付近へと一つずつ取り付けていった。そのおかげで、マーガレットの割礼を施された女性器はすっきりとした縦筋だけの見た目を与えられた。
「これでいいわ。しばらく付けておけば、矯正されるから」
これによって、マーガレット・デイビスに対する割礼は、そのすべてが終了した――同時に講堂内の照明が灯される。
女性医師と老婆の二人に助けられて、白人女性はふらつきながらも、ゆっくりと立ち上がる。彼女は、たった今受けたばかりの苛酷な肉体的試練によって、意識が著しく混乱していて、自分の性器が切り取られてしまったことをまだ本当には実感していなかった。
しかし、今、丸椅子の右側に立たされたマーガレットは、他の女性たちが開ききった割れ目から突き出している陰核を未だに晒し続けているのに対して、そこに取り付けられた三個のリング状のクリップでぴったりと閉じ合わされた縦筋だけを晒して、群衆と向かい合っていた……。

第七話　ジニーの割礼（前書き）

【警告】本文中には女性に対する猟奇的な虐待を克明に描写しているシーンが多々あります。人体切断（具体的には性器切除）や流血の類が苦手な方は閲覧を控えてるようにしてください。

第七話　ジニーの割礼

ハーディオ地方――バータンレ宗教学校にて。

ファティマが割礼台を掃除して、次に行われる切除術のための道具を準備している間、サリマ・ボーガー医師は講堂内の自分たちの席からやってきたイスラム教の神学者と宗教学校の校長の二人と笑い合っていた。

その様子を遠目に見ながら、ジニーは恐怖で全身を小刻みに震わせていた――たった今、母親が残虐に割礼を施されるところを目撃させられ、そして、これから同じようにして自分も陰核切除術を施されるところなのだ。

すべての準備が整うと、再び講堂内の照明が落とされ、ステージ上に設置された投光機が灯る。これからジニーが為すべきことについて、女医が囁き声で事細かに説明している間も室内は静寂に包まれたままだった。

ジニーは指示された命令に従って、ブラジャーを外して全裸になると、ステージの前方へ進み出る。二十代の白人女性は母親と同じように、赤紫色に充血して大きく勃起した陰核を観衆に晒すために、両手で大陰唇を目一杯くつろげなければならなかった。もちろん、その部分には投光機の強力な照明がピンポイントで当てられている。

その恥ずかしい行為をジニーが絶望的な気持ちで実行すると、ボーガー医師が質問の形を取って、新たなる命令を下してくる。

「ふだん、どうやって自分自身を慰めているか、見せてもらえますか？」

少しだけ躊躇した後、ジニーは陰核亀頭の先端に薬指をそっとあてがうと、異常なサイズに膨らんでいるラブボタンを転がすような動きで、ゆっくりとやさしく愛撫し始めた。すると、その様子を眺めていた群衆から侮蔑するような野次と嘲笑が湧き起こった。

女医も呆れたような顔で叫ぶ。
「なんなの、それは!?　まるでセックスに関する知識がない少女がするような自慰の真似事なんかして！　そんなやり方で、これほど大きくなるはずがないでしょ！」
　サリマはそう言いながら、ジニーの後ろに回り込んで腰の両脇から左右の手を下腹部へ伸ばして勃起しきっている陰核を掴み取ると、あたかもそれがペニスであるかのように荒々しい動きで男性風のマスターベーションを与え始めた。
「ほら、いつもはこんなふうにしてるんじゃないの!?」
　ジニーは激しい屈辱感にもかかわらず、この忌まわしい手淫によって、快楽の呻き声を漏らさずにはいられなかった。しかし、その様子を冷徹に観察していたボーガー医師は、白人女性がオルガスムに達する直前で、その手の動きを止めてしまう。
　それから、ファティマが性的な快楽と欲望との狭間で激しく痙攣し続けているジニーをテーブルの上に跪かせ、観衆に対して割礼前の性器をお披露目する。老婆は観客たちが十分に満足するのを見計らうと、丸テーブルをグルリと半回転させた。そして、おもむろに女医が割礼の作業に取りかかる。
　静まりかえった講堂内には、今、サリマによって小陰唇を切り取られているジニーの引き攣るような息遣い以外は何一つとして聞こえていなかった。それは軽くつねられているような感覚で、彼女はあまり大きな苦痛を感じなかった。しかし、自らの肉が切り刻まれている感触は、ぞっとするような気分をもたらしてはいた。
　真正面の暗闇を見つめながら、ジニーは母親にされた処置と同じことが、今、女性医師によって自分の股間でも為されていることを完全に自覚していた。そして、それが他の西欧人女性たちの目に、どのように映っているかも十分にイメージすることができた。
　一方、次女のサマンサも割礼を施されつつある姉を見つめながら、その野蛮な行為に震え上がっていた。
（なんて酷いの！　あの医者は姉さんをオルガスムの縁まで追い込

んでおきながら、クライマックスには達せさせないまま、クリトリスの切除を実行する気なんだわ。姉さんがオルガスムを感じることができる最後の機会だったというのに……。そして、この後、切り取られるのは、私なんだわ……。切られた後でも、何か性的に感じることができるのかしら……。それとも何も感じられないのかしら？　もしかして、別の何かを感じることができるのかしら？　でも、ママがされたように体の中にある部分まですべてを抉り取られてしまったら、たぶん、クリトリスのあったところでは何も感じられないかもしれないわ……。それなら、ヴァギナは、どうなのかしら？

　ヴァギナでなら快楽を得ることができるのかしら？　それとも感受性が鈍くなって不快になるだけなのかしら？　そして、性的な願望は、どうなるのかしら？　切られてしまったら、不感症になって性的な願望はなくなるのかしら？　あるいは、性的な願望を抑え切れず、かえって増大させてしまうのかしら？　そして、常に性的な関係を求め続けなければならない、永久的な欲求不満状態に陥ってしまうのかしら？）

　アブドゥル軍曹が白人女性たちの運命について語ったにもかかわらず、サマンサ自身は身代金さえ支払われれば、自分たちは解放されるだろうと未だに信じていたのだ。そして、故国に戻ってからの自分の人生についても思いを巡らしていた。

（私がパンティーを脱いだとき、ボーイフレンドは、どんなふうに思うかしら？　切られてしまった部分を見られるのは恥ずかしいけど、性的欲求が燃え上がってしまったら、私は売春婦のように振る舞ってしまうかもしれないわ。たぶん、自分自身の性器をペニスによって貫かれることを激しく求めてしまうに違いないわ。もしかしたら、私は快楽を得るために、たとえ、相手が見知らぬ男性であろうと、体を与えてしまうかもしれないわ。そして、その男性が、私を抱いてくれるのなら、その人の性奴隷になることも厭わないかもしれないわ。たとえ、アヌスでセックスしたいと言われても承諾するかもしれないわ。私は自分の肉欲をなだめるためなら、なんでも

するに違いないわ……。でも、もしかしたら、その反対に、クリトリスを失った私は、まったく性的欲求を感じないかもしれないわ……）
　切り取られたジニーの小陰唇と陰核包皮が講堂内を埋め尽くす観衆に向けて掲げられる。同時に姉を乗せたテーブルが半回転して、尻の下から覗く女性器で勃起しきった陰核本体が剥きだしとなっている様子も人々の目に晒された。それを見たいと思う者たちが十分に堪能した後、次の段階に進むため、彼女は再び観衆と向かい合わせにさせられる。
　サマンサは、先ほど、女性医師が姉から奪った最後のオルガスムについて考えていた。性的に欲求不満な状態のままで割礼を施されるというのは、姉にとって非情に不幸なことかもしれない。彼女は、女医が姉の陰核をその根から完全に摘出するだろうということと、その陰核切除術の苦しい、また、快楽のないオルガズムに達する瞬間まで、姉が男性とセックスしたときにあげるような嬌声を発し続けるだろうということも知っていた。
　そして、今、ボーガー医師は本日二度目となる陰核切除術を開始した――。

――最後の瞬間、無数に瞬く星の輝きで視野を覆われ、意識を真っ白に覆われたジニーは、仰け反らせた上半身を激しく震わせた。
「あああああああああああああああああ…………………」
　母親と同じように、人生で最後となったオルガズムからの叫びを長々と発して、その娘も性的な快楽を永久に失ったのだ。
　母親と同様、大陰唇の間にあるものすべてを切り取られてしまったジニーは、開ききっていた陰裂をやはり三個のリング状クリップによって閉じ合わされた。そのとき、汗にまみれた太腿は、依然として小刻みに震えていた。
　その陰門への処置が済むと、ジニーはステージ上の〝切られた〟女性が待機すべき場所へと移され、母親の隣で観客たちと向かい合

わせになるように立たされた。

第八話　サマンサの割礼（前書き）

【警告】本文中には女性に対する猟奇的な虐待を克明に描写しているシーンが多々あります。人体切断（具体的には性器切除）や流血の類が苦手な方は閲覧を控えてるようにしてください。

第八話　サマンサの割礼

ハーディオ地方――バータンレ宗教学校にて。
大講堂の照明が暗くされる。そして、今、投光機のスポットライトを浴びてステージの端へ歩を進めているのは、サマンサだった。豊満な乳房はブラジャーで覆われているものの、大きく勃起している陰核は晒けだされたままだった。
『健康診断』の間、ボーガー医師とファティマは捕虜たちに対して、経歴と素行についても質問していた。そして、女医がサマンサにブラジャーを取るように命じたときに、彼女は、この後、どのような展開となるかを理解していた。
命じられたとおり、サマンサがブラジャーを外すと、弛みきって垂れ下がっている巨大な乳房が露わになった。
「あなたの乳房は異常に大きく発達していて、若い女性にとしては不釣り合いなほど弛んでいるわね」
ボーガー医師が意地の悪い笑みを浮かべながら尋ねる。
「どうしてなのかしら？　その理由を説明してください」
一瞬、躊躇した後、サマンサは答える。
「私は数か月前に妊娠しました。その妊娠直後から乳房は大きくなり始めました。そして、今は、こんなふうに弛みきっています」
「それでは、今、あなたのお腹に赤ちゃんがいないのは、どうしてなのかしら？」
「それは……、私が……妊娠……中絶したからです……」
「どうして、妊娠中絶をしたのかしら？」
「それは……、お腹の子どもの父親が誰かわからなかったからです！　私は……何人もの男性とセックスしていました。特定のボーイフレンド以外に、たまたま出会った何人も男性と……！　そんなときは、可能な限りアナルセックスだけで済ませるようにしていまし

たが、それでも妊娠を避けることができませんでした……」
野次と怒号が講堂を埋め尽くす群衆から沸き上がる。
「淫乱な売春婦に道徳の刃を！」
「ふしだらな白人女に慎み深さと純潔を！」
「そんな発情期の雌猫なんか、さっさと切っちまえ！」
女性医師との屈辱に満ちた遣り取りが終わった後、ついにサマンサも姉と同じようにテーブル上で跪かされるときがやってきた。彼女が丸テーブルの上に乗り、四つん這いになって下半身を突き上げると、サリマがナイフを手にして後ろから近づく。それから、目前に突き出された白人女性の外性器で自らの仕事を行い始めた。
小陰唇をゆっくりと切除していく刃の動きを感じ取ったサマンサは、真正面に向けていた目を大きく見開き、低い呻き声を断続的に漏らす。同時に胸から垂れ下がって机上に大きく広がっている乳房の弛んだ皮膚を激しく波立たせていた。
ここに至っても、サマンサは身代金が支払われ、いずれは解放されるだろうと信じ切っていた。だから、彼女はボーイフレンドたちが自分の変更を加えられた女性器を見たときに、なんと言うかをあれこれと思い巡らしていた……。
（たぶん、何人かのボーイフレンドは気分を害するかもしれないわね……）
サマンサは考え続ける。
（でも、好都合だと思う男性たちもいるかもしれないわ……。だって、前戯に時間をかける必要がないんだから！）
ファティマが怒り狂う群衆に対して、切り取られた陰核包皮と小陰唇を見せているとき、サマンサは自分の股間で行われている処置に違和感を覚えた。
（医者が、今、私にしているのは、ママや姉さんにされたものとは、どこか違うような気がするわ……）
陰核の根を抉り出されるような刃の感触がなく、なにか輪っかになっているものを陰核の付け根に嵌め込まれたような感じがした――

—それがきつく締められることによって、血流を遮られた器官は、ますます大きく膨張していくようだった。
（私……クリトリスを切り取られずにすむのかしら……？）
サマンサは戸惑いながらも自分の外性器で何をされたのかを思い巡らしていた……。
「さあ、起き上がって！　両手を頭の後ろで組んで。そのまま、しゃがみなさい！！」
しかし、女性医師は、そんなサマンサに考える余裕を与えず、次々と命令を下す。彼女が不安定な台上で膝を曲げ、腰を落として低い姿勢を取ると、丸テーブルがぐるりと回されて観客たちと相対するようにされる。
「もっと太腿を大きく広げて！」
サマンサが、その命令に従うと、彼女の股間から大きく突き出ている陰核を目にした群衆が笑い声をあげ始める。皮を剥かれて不気味な姿を晒している肉芽の根本に極細のワイヤーが巻き付けられていたのだ。
そのワイヤーの末端を手にしたまま、ボーガー医師が離れると、入れ替わるようにして、ファティマがサマンサの後ろに素早く回り込んだ。そして、両手の指先で紫がかっている陰核を挟み込むと、女医が姉にしたのと同じように男性器にするような激しい手淫を行い始めた。
「あああーっ！」
堪えがたい屈辱感にもかかわらず、サマンサは自身の性感が刺激されるのを抑えこむことができなかった。そして、ファティマの巧みな愛撫で性的な快楽がしだいに高まっていくのを感じて、大きな喘ぎ声をあげる。
「あ、あああぁぁぁっっ！」
サマンサは全身を激しく震わせて、その弛みきった巨大な乳房も跳ねるように大きく揺らせていた。講堂に集まった大勢の人前で、若い西欧人女性は、今まさに、クライマックスに達しようとしてい

た。
　オルガスムに達する叫びをあげようと、サマンサが大きく口を開いた瞬間、サリマが右手でしっかりと握り締めたワイヤーを勢いよく引っぱった——その直後、ファティマの掌の上に根本から断ち切られたばかりの陰核が残され、西欧人女性も驚愕と欲求不満、そして、激痛から大きな呻き声をあげていた。
「ヴ¥◇ギ※ア〇&々————ゝ！！」
　なんと、サマンサは性的なクライマックスに達する直前に、自らの快楽の源を極細の金属繊維によって切り落とされたのだ！　そして、群衆は、ファティマがその刈り取ったばかりの収穫物を高く掲げたとき、罪深い淫乱な女性に加えられた処罰に対して拍手喝采を送っていた！
　そんな喧噪の中、最前列の座席に腰掛けている二人の買い手が話し合っていた。
「とても素晴らしいショーじゃないか！　そのうえ、あの淫売な白人女、あれが間違いなく妊娠できることも証明されたしな！　俺は、あの親娘を妊娠させる目的で買おうかと思ってるんだ！」
「そうだな。三人も生んでるんなら、四十五歳だとしても、まだ何人かは生むことができるだろうさ……」
　サマンサが腰を下ろし続けている間、ファティマは大陰唇を閉じ合わせ、それらを留めておくリング状のクリップを取り付けていた。さらに彼女を立ち上がらせる前に、その位置を利用して真っ赤な張り形を肛門へゆっくりと挿入していった。
「このショーが終わるまで、それでボーイフレンドたちとの逢瀬を偲ぶといいわ！」
　その言葉に、講堂内の観衆は再び大爆笑して喝采した。

第九話　シンシアの割礼（前書き）

【警告】本文中には女性に対する猟奇的な虐待を克明に描写しているシーンが多々あります。人体切断（具体的には性器切除）や流血の類が苦手な方は閲覧を控えてるようにしてください。

第九話　シンシアの割礼

ハーディオ地方――バータンレ宗教学校にて。
屈辱的な方法で割礼を施されたサマンサの姿を見せつけられたシンシアは、これらは自分たちに下された神罰に違いないと思っていた。
（サマンサは、付き合った男性全員と避妊具も使わずにセックスし続けていた放蕩生活を認めたわ。そのうえ、彼女は不道徳な関係によって赤ん坊ができたことを隠すために妊娠中絶までしていたんだわ！）
そして、シンシアは自らをも省みる。
（でも、私だって似たようなものだわ……。どうして、ジェイムス――ベロニカの夫なんかと不倫関係に陥ったのかしら？　彼と不倫関係になった理由は、いったい何……？　ロバートと一緒に暮らした三年間、私はずっと貞淑だったわ……。私の肉欲を呼び起こしたのは、開放的なサマーバカンスと豪華クルーザーによる船旅だったのかしら？　いいえ、違うわ。ほんの数週間前、ロバートが、私よりも母の財産に対して関心を持っているということに気づいたからだわ……。でも、船旅が始まって、たった三日で、どうして、見知らぬ男性の腕の中にいることができたのかしらか……？　そのうえ、ロバートに対してさえも、結婚以来ずっと拒み続けていたフェラチオを出会ったばかりのジェームズにはしてしまったわ……。どうして、私は、ジェームズの“もの”をしゃぶり、彼の出したものまで飲み込んだりすることができたのかしら？　――ああ、なんてこと！　なんて罪深い女なのかしら。私は自らの恥ずべき振る舞いの報いを受けなければならないんだわ！　ああ、神さま、感謝いたします！　今、私は大勢の男性たちの目前で全裸にされて、死に勝るとも劣らないほどの恥をかかされています！　さらに、私の罪に対す

る償いとして性器を切り取られるところです！　神さま、このような罰を私にお与えくださったことを心から感謝いたします！）
講堂の照明が暗くなると同時に、シンシアはブラジャーを取り去ってステージの前へ進み出た。さらにファティマの命令も待たず、自ら陰門を大きく広げると、自分の大きな陰核を観衆の前に晒して見せる。
「自分から見せびらかせていやがるぞ！」
群衆は、シンシアの性急な行動に呆れ返っていた。
「まるで早く切られたがっているみたいじゃないか！」
ファティマが、そんな白人女性を丸テーブルへと誘導すると、彼女は何ら躊躇することなく、その上に乗って跪く。そして、そのまま四つんばいとなり、上半身を下げて腰を上げ、体を上ぞりにすると、その太腿を大きく広げた。
「今すぐ、私のものを切り取って！」
シンシアは、女性医師に懇願する。
「お願い、できるだけ早く！」
「何もそんなに慌てる必要はないわ！」
笑いながらサリマは答える。
「すぐにお望みどおりにしてあげるわ！　それで、どんな些細な性感も残らないわ。中身がない、単なる割れ目が残されるだけよ。だから、あなたが淫靡な誘惑に負けるようなことは、もう二度とないはずよ！！」
そんなサリマの残酷な宣告を耳にしながら、シンシアは夫のロバートや不倫相手のジェームズの安否について、ふと思い浮かべる。
（そういえば、一緒に捕まった男の人たちは、どうなったのかしら？　ここの連中は、あの人たちをどうするつもりなのかしら？　ああ、もしかしたら、すでに処刑されているかもしれないわね。この野蛮人たちが、私たちに対して行っていることを考えれば……。きっと、ヨットが襲撃される二時間前に、私とジェイムスがしたときが、彼が女性とセックスできた最後の機会だったに違いないわ……。

彼の最期の射精となっただろうたくさん精子を、私は間違いなく自分の胎内に受け入れたんだわ……）
シンシアが白人男性たちの運命について思い悩んでいる間にも、マーガレット、ジニー、サマンサの親娘たちのときと同様に、ボーガー医師は割礼の道具を整えていく。一方、白人女性も膨らみ続ける陰核を処罰の刃に捧げるため、膝を少しずつ左右にずらせて太腿をより大きく広げ、さらに体をきつく上反らせて尻を突き上げ、可能な限り陰門が晒け出されるようにしていた――そう、彼女は自ら進んで、そうしていたのだった！
女性医師が割礼の準備を終えて西欧人女性の後ろに回り込むと、雑多なざわめきに満ちていた講堂内に静寂が訪れ、観衆たちが固唾を呑むような表情でスポットライトを当てられたステージ上の一点に視線を集中させる。
シンシアは鋭い刃が小陰唇を切り進み始めるのを感じたとき、女医に対して自らの願望を囁くのを抑えることができなかった。そして、それはマイクとスピーカーによって講堂内にいるすべての人々の耳にも届けられた。
「そう、そのまま切って！　すべてを切り取ってちょうだい！！」
小陰唇と陰核包皮に対する割礼を受けている間、シンシアは自分の顔を凝視し続ける群衆と向き合っていた。
（ああ、私は今、素っ裸で、そのうえ、破廉恥なポーズをして、性器を切られてるんだわ。そんな姿を、こんなたくさんの人の目に晒しているんだわ。そして、誰もが、私が切られている間、どんな顔をするか、興味津々で見つめているんだわ）
シンシアが忘我の境を彷徨っている間に、小陰唇と陰核包皮は綺麗に切り取られ、ファティマの手に渡っていた。彼女は次の処置が行われる前に、両手で丸テーブルの端をぎゅっと握り締めながら女医へ顔を巡らすと、小声で呟く――。
「引っ張れるだけ引っ張ってちょうだい！　そして、クリトリスを根こそぎにして！！」

――もちろん、その囁きもマイクに拾われ、講堂内の観衆たちの聞くところとなる。
シンシアの願いに応えるように、サリマが大きく膨れあがった陰核を強く引き始めると、白人女性は自らが口にしたように、それが根こそぎにされるのを手助けるため、さらに力を込めて背中を仰け反らせ、腰を大きく突き上げる。そして、蒼い瞳に恍惚な光を宿しながら、「もっと！　もっと！！」と喘いで全身を激しく震わせるのだった。
ボーガー医師が剥き身にした陰核亀頭の付け根にナイフを突き立てて、肉芽の摘出を開始すると、シンシアは興奮した呻き声をあげて強ばった臀部を激しくくうねらせた――切り進む刃先が快楽器官の縁からずれないよう、女医はナイフの柄をしっかりと握り締める……。
繊細な作業に没頭するサリマは、西欧人女性から肉欲の源泉を抉りだすという高揚感から自らの性的な興奮を抑えきれないでいた。これまで多くの女性に割礼を施してきたが、白人女性に対するクリトリデクトミー（陰核切除術）は格別だった――その楽しみを他人に譲ったことは一度としてなかった！
女性医師は根の深い部分まで十分に切り込んだと確信すると、シンシアの赤紫色に熟している西洋スモモをしっかりと握り締めて丸椅子から立ち上がった。それから、まるで陰核によって体を持ち上げるかのように、その下半身が丸テーブルから浮き上がるほどの勢いで肉芽を引っぱり上げた――実際、ほんの一瞬だけだったが、そのとき、膝頭がテーブルの上から離れていた。
その刹那とも言うべき間に、過大な負荷を加えられた陰核脚は、本人の体重と女医が引っぱり上げた勢いに耐えきれず、その末端部で鈍い断裂音を発しながら恥骨から分かたれた。そして、丸い切開部から跳ね上がるようにして勢いよく体外へ飛び出して、サリマの左手をぴしゃと打った。
「あああああああああああああ……………………」

それから、女性医師は盛大に悲鳴を上げ続けているシンシアの股間から千切れる寸前まで長く引き伸ばされ、ぴんと張っている陰核神経を、その付け根に最も近いところで、わざと時間をかけながら、ゆっくりと切断した。

割礼ショーを盛り上げようとするサリマ・ボーガーの、さりげないサービス精神に対して講堂を埋め尽くす人々からは盛大な拍手が巻き起こった。そして、とくに深い部分から切り取られた長大な根を持つ陰核を、ファティマから見せられた観客たちは、さらに大きな喝采で、その偉業を称えたのだった。

第十話　ベロニカの割礼（前書き）

【警告】本文中には女性に対する猟奇的な虐待を克明に描写しているシーンが多々あります。人体切断（具体的には性器切除）や流血の類が苦手な方は閲覧を控えてるようにしてください。

第十話　ベロニカの割礼

ハーディオ地方――バータンレ宗教学校にて。
ベロニカは丸テーブルの上にしゃがまされ、両足が左右にまっすぐに広がるまで太腿を大きく開かれていた。そんな状態にもかかわらず、彼女の性器は少女のような見映えだった。おそらく、その慎ましやかに閉ざされている割れ目は、割礼された後でも、その姿をなんら変えることはないだろう。
ファティマの指先が大陰唇を広げる――観衆の前に晒された薄桃色の小陰唇は、その幅がとても細く、また、非常に薄い肉襞だった。それに対して、陰核だけは麻痺クリームの催淫作用によって大きく膨らんで包皮から突き出ていた。
「この西欧人女性のラビアは極めて小さく、その厚みもほとんどありません！　ですから、ラビアを切除する必要はありません」
女性医師は観客に対して、そう告知しながら陰核包皮だけを器用に切り取っていく。
「したがって、クリトリスのみを切除する割礼を施します！」
二十四歳の白人女性が割礼を受けている姿を見ながら、タラは現在の状況を疑問に思っていた。ふつうに考えれば、母、長女、次女と続けば、その次は同じ家族の三女である自分の番のはずだ。ところが、実際に姉たちの後に割礼を施されたのはシンシアだった。そして、今、それはベロニカに対して行われている。
(最年長のクラウディアさんが、この割礼ショーの一番最後の人だというのは、なんとなくわかるけど……。でも、どうして、私が最後から二番目になるのかしら？)
ついに、ベロニカの陰核亀頭は、その根本まで完全に剥かれてしまった。そして、彼女は群衆に対して、その股間を展示するために跪くよう命令された。

「この西欧人女性に対するクリトリスの切除は、特別な輪ゴムを使用して、じっくり時間をかけて行います！」
女性医師のその告知に対して、ベロニカは、二人のアラブ人女性が自分に対して如何なる処置を施すのか、あれこれ考えみたが、まったく想像がつかなかった。また、じつは自分に対する割礼が、他の放蕩な西欧人女性たちと比較して、慈悲に満ちたものであることをこのときには思いもよらなかった。
サリマが細長い先端部分が三つに分かれる小さなグリッパーを取り上げて、それで勃起しきった陰核全体を挟み込み、尋常でない力で引っぱったとき、ベロニカは丸テーブルの端で上体を弓形に仰け反らせて大きく呻いた。
女医がグリッパーの持ち手近くに嵌っていた極細の輪ゴムを滑らせながら先端部に向けて移動させていく――もちろん、ベロニカからは見ることができない。そして、突然、彼女は金切り声をあげながら白目を剥いて、さらに激しく背中を仰け反らせる。
「うあああーっ！」
強力な締付力を有する輪ゴムが引き伸ばされた肉芽の付け根をきつく締めあげていた。そして、サリマがグリッパーを解放すると、たちまち陰核は鬱血し始め、その大きさをさらに増していき、まさに赤紫色をした大きな西洋スモモそのものだった。それは放置されれば、快楽器官をゆっくりと壊死させるに違いなかった。
「輪ゴムによる割礼は、若干、時間を必要とするわ！」
サリマは笑いながら説明する。
「この西洋スモモは自然と落果するまでの数日間、大きく膨らんだ状態を保ち続けることができるわ。ただし、私たちは落ちた果実をなくしたくはないわ！」
ベロニカを立ち上がらせた女医は小柄な白人女性の細い腰の周りに弾力性のあるベルトを巻く。それから、太腿の間に白いタオルのような布を滑らせ、それを弾力のあるベルトの前後で、その下に通して固定した。

「これで大丈夫だわ！　前と後ろ、どちらからでも簡単に外すことができるから、あなたの西洋スモモが落果してるかどうか、確認するのがとても容易できるわ。そして、この白い布を付けていることで、誰もがクリトリスを締めあげられているという事実を知ることもできるわ！」

ベロニカは陰核を保護する包皮を剥かれ、赤紫色に腫れあがった肉芽の根本をきつく締めあげられただけで、割礼を終えた白人女性たちの列へと導かれることになった。